

第 71 回 SSC
ISTH Council Report 2025

東海大学医学部内科学系循環器内科学
後藤信哉

日本の多くの先生方のご努力により ISTH の Council Member に選ばれて、初めての実質的な ISTH Council Meeting がワシントン大会にて開催された。バンコク大会にはオブザーバーとして参加したが、発言の機会はなかった。また、評決に参加することもできなかった。今回は発言、評決への参加可能とのことと張り切って参加した。

Council meeting は ISTH の理事会であるから、開催の基本は日本の学会の理事会に似ている。理事は 2 年ごとの選挙で選ばれている。任期は 6 年である。学会の継続性を維持するためには、理事以外の常勤のスタッフが重要な役割を演じている。理事会の資料なども ISTH のスタッフが入念に準備している。事務職員が議案の詳細を説明するのが基本であるが、理事会の中の各委員会の代表が発表することもあることは日本の学会理事会にも似ている。選挙に選ばれた訳ではない行政官と、選挙で選ばれた議員の関係にも類似している。

会議の議論が英語であり、長時間であるとのことと結構疲れる。両隣の理事などとはお話しすることもあり、休憩時間に他の理事たちと話をすることもあるが、残念ながら日本語は出ない（一人、片言の日本語を話せる理事がいるが..）。日本語を話す理事が 1-2 名居れば理事会の疲労は激減すると思う。血栓止血情報センターでは、以前から複数の理事を ISTH に送り込む議論がなされていた。実際、理事になってみると、日本人が私の他に数名いれば楽だと思う。ISTH の理事は 2 年ごとに選出されて、各人が 6 年の任期である。今年は私の次のクラスの選定の年である。今の日本は 1990 年代と異なり、世界の注目は少ない。それなりに業績のある人を情報センターにて応援して、戦略的に次の理事候補を国内にて選定し、その人を世界に売っていく必要があると思う。

理事会の議論の内容について、理事は学会と秘密保持契約を締結している。残念ながら議論の詳細を本稿に記載することはできない。しかし、おおかた何が話し合われているわけらなければ情報センターの価値もなくなってしまふ。秘密保持に触れないように工夫しつつ ISTH 理事会の模様を紹介したいと思う。

世界のどこにあっても、組織には目標がある。ISTH の mission は「The International Society on Thrombosis and Haemostasis (ISTH) advances the understanding, prevention, diagnosis and treatment of conditions related to thrombosis and hemostasis. The Society is dedicated to transformative scientific discoveries and clinical practices, the development of young professionals and the education of physicians, scientists and allied health professionals wherever they may live.」となっている。理事会でも誰かが mission statement を唱える。各

種の委員会でも mission statement を音読して、目標を忘れないように努力している。血栓止血領域のメカニズム解明、予防、治療の開発などを世界一体となった実現するためには資金が必要である。全ての他の組織と同様に組織の予算、決算、財産の現状、今後の収入、支出の予定などに長い時間をかけて議論する。ある程度の資金がまとまれば ISTH の資金を眠らせておくよりも投資しようとの議論になる。われわれは専門家ではないので、外部の専門家に投資を委託する。リスクを重視するか？、ベネフィットを重視するか？、投資の条件の詳細を議論する。欧米人は金勘定が得意である。筆者などは金勘定を汚いとする侍の子なので学会における投資の議論には抵抗がある。しかし、組織の維持にとってお金の勘定は極めて重要である。Council member は皆、学者であるが、予算、決算、財産などについても多くの議論がなされることになる。

以前にも記載したが、ISTH の学術集会のマネージメントは、池田康夫先生が ISTH Kyoto 2011 を施行したときとは大きく変化した。日本の血栓止血情報センターの皆様にも ISTH の方針の転換を完全に理解頂く必要がある。ISTH 2011 の時代には ISTH は開催地と会長を選定し、実際の開催については日本 local に任せていた。多分、2011 年以前の日本での ISTH の開催の方向性も ISTH 2011 と同様であったのだと思う。現在は、各地域での学術集会の開催であっても、地域の local organizing committee よりも ISTH 本体の寄与がはるかに大きくなっている。すなわち、開催地は参加者、場所の特徴、ホテル、物価などの状況に基づく予算、決算の予想に基づいて ISTH が開催地を選定する。実際は ISTH の事務方が細かな条件を精査して、Council meeting にて議論、最終的に Council Member の投票により開催地を決定する。学術集会におけるプログラム策定などは Annual Congress Planning Committee (ACPC) が決める。ACPC Chair は ISTH が選挙で決める。すなわち、以前に比較すると local organizing committee に任せる部分がほとんどなくなった。開催地、プログラム選定の主役となるメンバーをいずれも ISTH 本体が決定し、ISTH が学術集会を運営するモデルとなった。特に、血栓止血情報センターにて中心的役割を演じている先生方には、ISTH の学術集会のマネージメント方針が大きく転換したことを理解して欲しい。将来、日本が注目されて、日本が開催地として ISTH に選定される可能性はある。しかし、オリンピックのように日本が候補として自ら手を挙げるのではなくて、ISTH が予算、決算、参加者数、スポンサーなどの状況を考慮して開催地候補に日本をあげ、理事の投票で日本が開催地に選定されれば日本での ISTH は将来もあり得るという意味である。しかし、日本での ISTH 開催が決まっても、プログラムなどの学術的開催内容を決めるのは ISTH が別途に選定する ACPC Chairman である。日本の血栓止血領域の学術的な力が弱いとなれば、日本で ISTH が開催されるとなっても、ACPC Chairman が中国のヒト、韓国のヒトになる可能性もある。科学的見地から考えれば日本が開催国に選定されることも重要であるが、それ以上に日本が ACPC Chairman を出すことが大事と筆者は考えている。Chairman になれなくても ACPC のメンバーに継続的に日本の研究者が選定されることは極めて重要である。

結局、科学的視点から世界の血栓止血学をリードできる人材を日本国において養成する

ことが最重要課題である。本血栓止血情報センターでも、国際舞台にて活躍できる研究者の育成を真剣に考える必要がある。筆者は、国際的視野の広い池田康夫先生の薫陶を受けたおかげで、若い頃から海外の知り合いが多かった。High Impact Journal への論文の発表などは国際舞台に乗り出すために重要であるが、世界の人がみんな一生懸命論文を読んでいる訳ではない。ちょっと会場で隣に座った時に話してみたら共通の知り合いがいた、意外に研究分野が近かった、ちょっとお茶を飲んでみたら食べ物・趣味が近かった、などの個人的つながりが極めて重要である。研究者は人間関係の構築が下手で、世界の狭い人が多い。人間関係の構築が苦手な人であれば、ISTH で話した東洋人のことを生涯覚えていることもある。将来、国際共同研究が必要になったときに名前を思い出してもらえるようになれば、共同研究を通じてさらに人間関係が深まっていく。情報センターの先生方には、若手の ISTH への参加を encourage する、なるべく外人と一緒にご飯を食べ、お茶を飲むようにすることを勧めて欲しい。私には Nature などの Big Journal の論文はない。でも、日本人といえば私しか知らないという人も多い。Last name がたまたま覚えやすい Go to であった、体型も特徴的であった、などの利点もあったが、小グループでの食事の機会が多かったことも理事選定への助けになったことは間違いない。

循環器領域でも、日本人は私しか知らない人が多いので、Circulation の Editor をしてくれ、Thromb Haemost の Editor をしてくれ、JAMA-Cardiology の委員をしてくれ、などの依頼が大量にある。一度断ると依頼は2度と来ないと思った方がよい。みな、日本人研究者などのこちらのことなどロクに知らないのだ。苦しくても、国際的な仕事を引き受けることが大事である。論文の査読についても、日本の研究者は一般に引き受け率が低い。また、査読の quality も多くの場合に低い。Big Journal に採択されれば、国際的に名前が売れそうであるが、質の高い査読ができる研究者と評価されると Editor の間での評価が高まる。査読がしっかりできるということは、専門領域の知識があり、批判能力があり、さらに優れた査読をかける人は教育能力が高い。依頼された査読を必ず受ける、制限時間内に著者、Editor を関心させる質の高い査読を書く、などの地道な努力を続けていると、欧米の雑誌から Editorial Comments, 総説などを依頼される機会も増える。オリジナル論文を出す以上に研究者としての国際評価を上げることができる。雑誌の Editor をしていると、欧米、特に米国の若手研究者の査読の質が極めて高いことに驚くことが多い。彼らも多忙であり、自分の論文に集中したいであろうに、査読を頑張る。これは、欧米、特に米国における科学者の評価の中に、対外的評価などが明確に規定されているからである。日本でも客観評価の試みはある。雑誌の IF、研究者としての h-index なども評価の指標ではあるが、科学コミュニティにおける貢献との評価の上では、査読、対外活動などの重要性を忘れてはいけない。国際雑誌の査読をしっかりすることも血栓止血領域の日本のプレゼンスを示すために必須である。

ISTH の開催地候補については詳細に調査して、詳細な調査に基づいて Council member の投票で決める。個人的にはバンコク大会は大成功だったと思った。しかし、ISTH の評価は高くなかった。アジアでは欧州、アメリカからの参加者が十分伸びなかったのが主要な理

由のようだった。ワシントンの大会も、米国入国の不安定性などが問題とされたが、現実には大きな問題にならなかった。2026年はパリである。花の都パリであるから、参加者が多いことが期待される。基本原則は欧州・アメリカの交互開催となった。以前は、欧州・アメリカ・その他地域であったが、バンコク大会がうまく行かなかったため当面欧州・アメリカが原則である。アメリカは合衆国のみでなくカナダを含む。2027年はカナダを含む北米の都市での開催になる。日本の血栓止血研究の底力が強いとなれば、アメリカの大会でも日本人を ACPC Chairman に選定することは不可能ではない。開催地として、日本が手をあげることを目指すとの発想でなく、日本の血栓止血学の底力をつけて、開催地にかかわらず最新のプログラムの選定には日本人研究者 ACPC Chairman に入れないと仕方ないと皆が思うような状況を作ることが血栓止血情報センターの当面の目標である。

ISTH council について、質問があればお気軽にメールをお送りください。血栓止血情報センターが ISTH と皆様をつなぐ場になることを期待しています。

東海大学医学部内科学系循環器内科学

Council Member for ISTH

後藤信哉

e-mail: sgoto3@mac.com